

2016年度成果発表会実施報告書

日時：2017年5月20日（土）13:00～16:00

会場：京都薬科大学 愛学館3階 愛学ホール

参加者数：36名（職員16名、学部生・大学院生18名、企業関係者2名）

2017年5月20日（土）に愛学ホールにて2016年度の成果発表会を開催しました。本学では、2016年度末までに4つの文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（戦略基盤事業と略する）が採択され、学内の多くの分野で研究活動が実施されてきました。その中で、2012年度に採択された戦略基盤事業である「バイオメタルと生体反応の連関解明に基づいた疾患治療ファルマコメタロミクスの確立（代表：安井裕之）」（以下「バイオメタル」）は、2016年度をもって5年間の事業最終年度を迎えました。今回は、5年間の総括を含め、2016年度の「バイオメタル」の成果報告発表会を行いました。

発表会では、学内で本プロジェクトに参画する全ての教員が会し（薬理学分野の藤井正徳准教授は海外留学中のため欠席、病態生理学分野の高田和幸准教授は他学会での招待講演のため欠席されましたが、病態生化学分野の石原慶一講師が代表して講演されました）、各々のプロジェクトにおける研究成果が、口頭（7演題）により発表されました。また、学外研究者としてご参画いただいている神戸女子大学の吉川豊先生も口頭発表をされ、大阪薬科大学の中村任先生には共同研究者として会の初めから終わりまで会場にご参加いただきました。

発表会当日は、36名の方々（職員：16名、学部生・大学院生：18名、企業関係者：2名）の参加のもと、活発な質疑応答が行われ、盛会のうちに終了しました。学部生・大学院生も参加していただき、本学の研究面におけるアクティビティーの高さを十分に感じてもらえたのではないかと思います。

文部科学省から供されている本事業のミッションは、「研究拠点の形成」と「若手研究者の育成」でありました。5年間の成果の1つとして、バイオメタルに関連する薬学領域の先端研究を学内に浸透させること、及びこれを実際に推進するための大型装置を含めた基盤整備については大きく進みました。同時に、大学院生を含めた学内における若手研究者の研究アクティビティーの活性化に繋がったのも確かです。今後は、次代を担う若手研究者を中心とした学内共同研究がより活発になること、薬学領域におけるバイオメタル関連研究で本学が国内をリードしていることを学会発表やシンポジウム講演によりアピールすること、学内研究グループの独自研究提案による外部研究資金の獲得などに繋げていく必要があるでしょう。これからも、本事業の5年間で得られた多くの蓄積や人脈を活かしていくことで、本学におけるリサーチマインドの醸成と研究アクティビティーの維持に尽力していきたいと考えています。



後藤 直正 学長



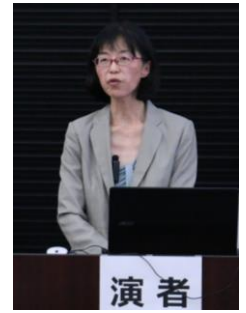
安井 裕之 代表



辻本 雅之 講師



天ヶ瀬紀久子 講師



小原 幸 准教授

【プログラム】

<開会の挨拶>

「プロジェクトの概要と中間経過について」

後藤 直正 (京都薬科大学学長)

安井 裕之 (代謝分析学分野・教授、代表)

<疾患と生体反応のメタロミクス> (座長：安井 裕之)

「末期腎不全患者における薬物体内動態および薬物応答性の変動に及ぼすバイオメタルの影響」

辻本 雅之 (臨床薬学分野・講師)

「ビスホスホネート系薬剤による消化管傷害における生体内微量元素とのキレート形成との関連」

天ヶ瀬 紀久子 (薬物治療学分野・講師)

「心疾患、腎疾患における微量元素と酸化ストレス」

小原 幸 (臨床薬理学分野・准教授)

<中枢疾患におけるバイオメタルによる生体反応制御分子メカニズムの解明> (座長：小原 幸)

「ダウン症モデルマウスを用いた解析」

石原 慶一 (病態生化学分野・講師)

「アルツハイマー病モデルマウスを用いた解析」

高田 和幸 (病態生理学分野・准教授)

「亜鉛によるグリア細胞機能制御 Zinc-mediated regulation of glial cell function

—気分障害発症機構の理解への展開—

長澤 一樹 (衛生化学分野・教授)

<金属錯体による疾患治療> (座長：石原 慶一)

「生活習慣病治療を目指した金属イオン・金属錯体の探索研究」

吉川 豊 (神戸女子大学 健康福祉学部・教授)

<イメージング分析とトランスレーショナル研究>

「トレーサーによるメタル分析および臨床メタロミクス解析」

安井 裕之 (代謝分析学分野・教授)

<閉会の挨拶>

安井 裕之 (本事業・研究代表者)



石原 慶一 講師



長澤 一樹 教授



吉川 豊 教授



質疑応答の様子